

幼児の造形表現とその特色

－ 描画と色相 －

幸 田 顕

Artistic Expressions and Their Particular Characteristics of Preschoolers Drawings and Colors

A kira kou da

．はじめに

私達は、いろいろな対象を直視しながら素直な気持ちで鑑賞して、そのものの姿をどのような物として造形化しようとするか考える。古今東西を問わず、幾度となく係わってきた。そのことは、幼児の世界にも多く見ることが出来る。人は、この世に誕生した時から表現との関係は深い。そのことは、幼児の色相やフォルムの形式化、そして、表面の単純化とドロ - イングによっても大きな変化が見られる。私は、このような観点から幼児の表現がどう係わりながらフォルムを構成し、色相としても変化していくのか。また、幼児の「表現」という行為は、生まれてまもなく変化する姿によって理解することができるのではないか。人間が特別な生活や造形表現をするということだけでなく、日常の生活がいろいろな状況を写し出してくれる。表現することのできる幼児と表現することを躊躇する幼児が、現在から未来へと繋がって成長していく。その真摯な姿は、将来への夢として発展することであろう。幼児は幼児なりに受け止めていると思うが、そのような角度から幼児の造形表現に対する形と色相の「表現」を分析して見ることにしたい。

．幼児の造形表現へのアプローチ

幼児が、対象の美しさをどのような角度から知覚して感情表現として具体化するか、考えてみれば大変興味深い側面を持つものである。描画活動として、なぐり描きから始まってさまざまな画面への形となり偶然性も加わっていくと考えられる。

しかし、幼児の行為は大人の意識の中とは全く正反対のこととして、幼児なりの自然な姿で求心的な造形表現が大切になってくると考える。人は、考えたり、ある行動をとったりするさまざまなポーズの中で、より高度なものを必要とする。造形表現が、あたり前のような順序で展開する以上に、さまざまな状況の中で基礎的能力の形式が大切なこととなってくるのである。1人の人間としてどう存在感を示したら将来の姿として望ましいのか。視点の捉え方が、さまざまな表現活動の基礎的な能力の育成と自然に成長して行く素地になるのである。つまり、基礎的な能力と生れながらの能力との

ラスによって、人間としての形が整ってくるものと考えられる。内面的なものと同外的なものがプラスされて、より積極的な造形表現がなされてくる。対象性のあるものには年輪があり、その年輪は将来に向かって健全なものにしなければならないだろう。1年1年の姿は成長して積み重なりより前進することは、幼児の成長と全く同じである。発達過程の中で、人それぞれの環境の違いはさまざまな変化があるから、変化の状況を上手にとらえながらつぎのステップを考える。同じ状況と変化の状況との連続性によって、発達が見受けられるとするならば、それぞれの時期に適切に対応していく配慮が必要になる。能力が、幼児の成長過程でのタイミングと発達の側面性との二面性によって、適合性のある精神性豊かなものとして考えていかなければならない。そこに、造形表現の教育としての価値が問われてくることになる。そして、独自の成長過程と能力の形成が存在するのである。赤ん坊が、少しずつ変化し意志の伝達をどうして活動を続けながら、いろいろな感覚の発達を伴う。意志と運動、周囲の環境、外圧等によってさまざまな感情変化や欲求が、精神の発達になることを考えると、如何に表現することが大切であるか認識できるのである。

・各年齢による形と色相の視点

幼児の表現活動の中では、身近な生活環境の中からテーマを用いることが多い。遠くの世界を頭の中に組み入れることは余程でないと難しい。しかし、普通の幼児は、周りの環境の中で目についたもの等自分の世界以外のものには無関心である。そのことが切っ掛けで、形や色相にもそれぞれの特色がある。表現活動をどうして、いろいろな象徴性を知覚の中に創造して、何も無いところから何かの形や色を作って発展していくプラス思考である。しかし、対象性の破壊やカラーの消滅等マイナス思考もないわけではないと思う。色や形をイメージの中で汲みとって、表現として生かすことは一般的であり、発想力やイメージの育成として主体的に表現する。幼児の種々の遊びの中で見つけたり、豊かな生活経験や知識がその源になることも事実であろう。

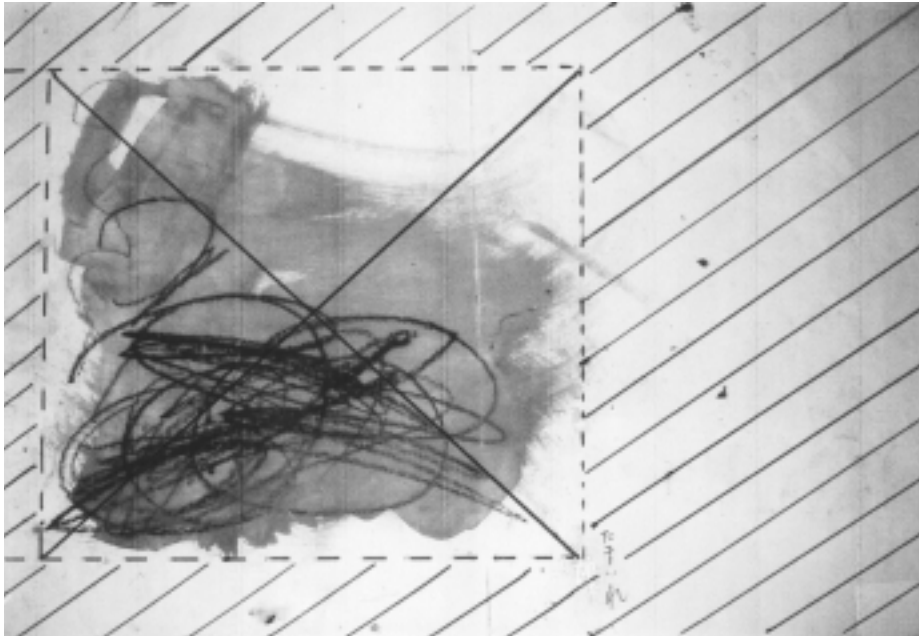
幼児の作品を例にとって考えて見たい。

(図1)の作品は、3歳男の子の絵であり、(図2)の作品は、3歳女の子の絵である。まず、この2点の絵から、特色と問題に対する今後の方向性について考えて見ることとする。

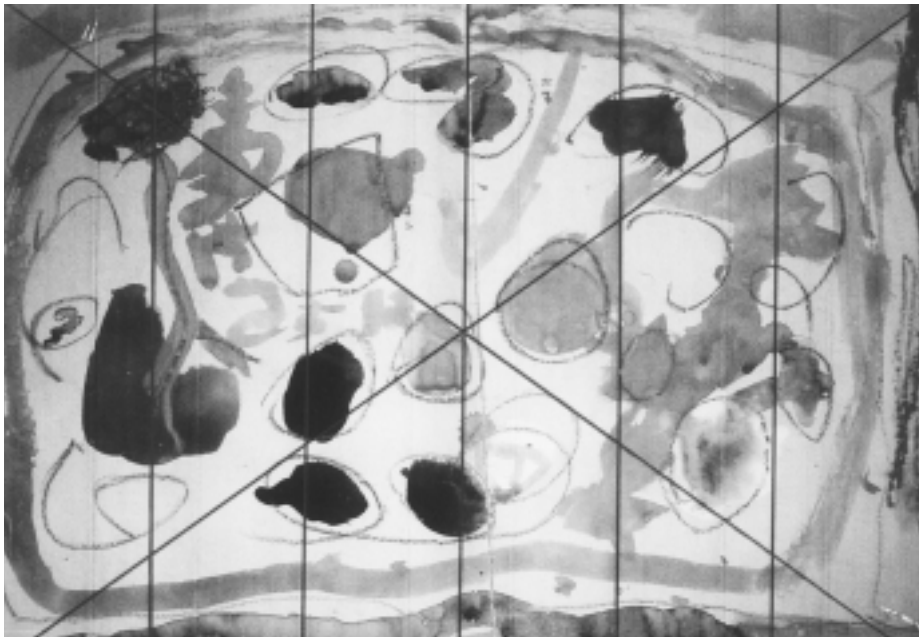
(図1)の男の子の絵も(図2)の女の子の絵もテーマは「運動会での玉入れ」ということが、絵をどうして理解できるのである。と言うのも幼児が、描き終わった段階で「意味づけ」として、担当者が絵柄の脇に簡単な言葉の表現を明記してあり、図柄がいろいろなものに見立てられたり、幼児なりの視点で表現されたりすることからの理由である。

さて、3歳児(図1)の絵は画面の3分の1位の表現展開で、絵の具は混色の色相である。黄色と赤色をプラスした肌色水彩で、画面の2分の1が上下の余白になって、粗雑と思えるような筆勢で塗り捲っている。色面から線も乱雑な横殴りと思える表現である。勿論、形などは何を描いてあるか解らない。(図1)の絵は、斜線部分が余白になっている。つまり、3分の2は余白で3分の1が描画表現である。それに対して、(図2)の絵は、同じテマの中にも画面全体の構成がいきとどいたものになり、対象物の安定感がある。画面の6等分割が証明している。形が全体的なものから細部へと移り色数も多い。(図1)の絵が、部分的表現として感じられるのも、周囲の余白が余りにも多いため対象物の形が小さく感じられる。それに対して、(図2)の絵は、全体の6分割で理解できるように、大きな形として左右、上下の流れがリズムカルに描かれている。(図1)の絵は、線の乱雑さから幼児の纏りの視点は希薄になり、色調の単純さが目につく結果となっている。男の子の絵は、色の効果から見

(図1) 3歳男子 運動会 -----玉入れ-----



(図2) 3歳女子 運動会 -----玉入れ-----



ると背景の単調さと色数の減少選択によって、全体の色彩感が乏しいのである。幼児の発達段階において色彩的効果は、外界からの刺激によって単色として活用するより複数用いることにより（多色）、大きな変化が感じられる。色と色の隣り合わせの配置は、各色が持っている特色を表現するのが最も効果的であり、同色系の色が変化したり異なると思われる色は、同じく見えたりその性格と効果は面白い。このように幼児が色彩的表現による色相は、(図1)の絵のように色数の少なさと(3~4色)形の単調さは、幼児の心理的側面から考えて見ると、(図1)の絵は、主色は赤系の色によって塗られている。赤系のものを連想するならば、桃や林檎、苺等にまた、太陽のような情熱さも感じられるのである。つまり、(図1)の絵の幼児は、形の単調さと色相の限定によって開放的性格さと未分化の両面をもって成育されてきたのではなかろうかと思われる。それに対して、(図2)の絵、女の子の作品から精神の安定性が感じられ、より、複合的混色による性格の開放性、大らかさと具体性のある観察と思考性が見られる。(図1)(図2)の絵をとうして、幼児2人の成長度合いの差異は、生活環境による変化が感じられるのではなかろうか。

つぎに、4歳児の作品について考えて見たい。

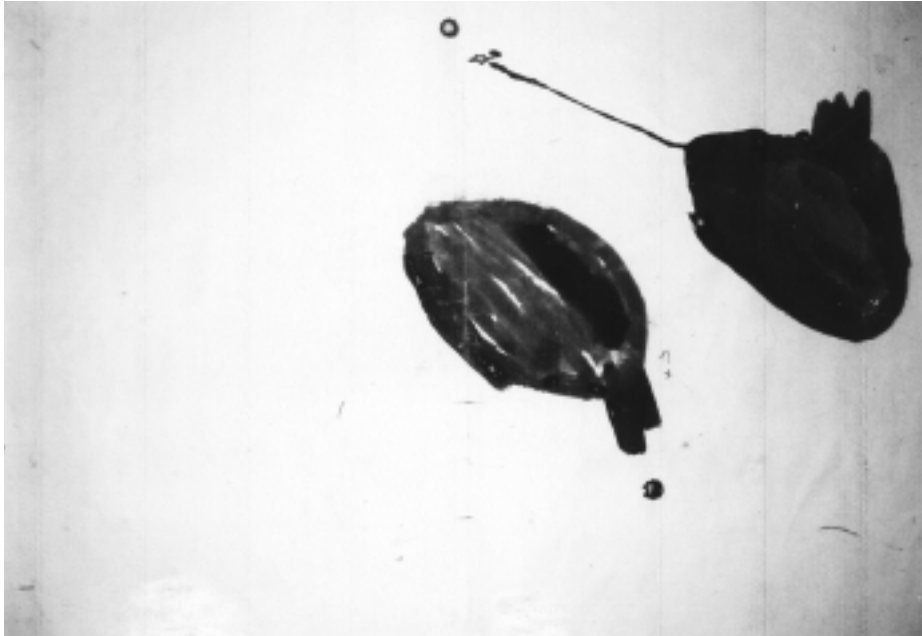
(図3)と(図4)の絵は男の子の作品である。ある時、4歳のクラスで水族館を訪れた。沢山の魚が元気よく泳いでいる姿を見た子供達は、びっくりしたり喜んだりしたことであろう。今までこのような姿の魚は、あまり見たこともなかったのではないかと想像すると、大変興味深いものである。早速幼稚園に帰ると、印象画としての表現活動に入ったことであろう。(図3)と(図4)の作品が、幼児そのものの姿を見ることができるのである。

(図3)の男の子の絵から理解できることは、画面全体の大きさから表現した「カメ」の形が、右側の画面に片寄って表現されていることと「カメ」の形がよくわかりにくいものになっている。そこで、担任が意味付けとして「カメ」として名前をつけてある。色彩の素材として、水彩絵の具を使用してあるが、形の未分化と同時に赤と白によるピンクの混色と青と白の混色や茶色の色相等、色数そのものの限られた活用によって、表現全体の未分化が感じられるのである。実際に幼児が、対象物をどのような観点でとらえていくか。つまり、自身のイメージと発想、感性の中での表現がなされていくものと思われる。全く対象物が無のものとは、幼児が受け止める視点は大きく違ってくるであろう。色や形の求め方がイメージの中と、現実のポーズの中でリアルに求められていくことは幼児としては当然のこととして推察できるのである。しかし、(図3)の作品に関して素直な視点を感じとることはできるが、表現と認識が必ずしも合致されてないと考える。

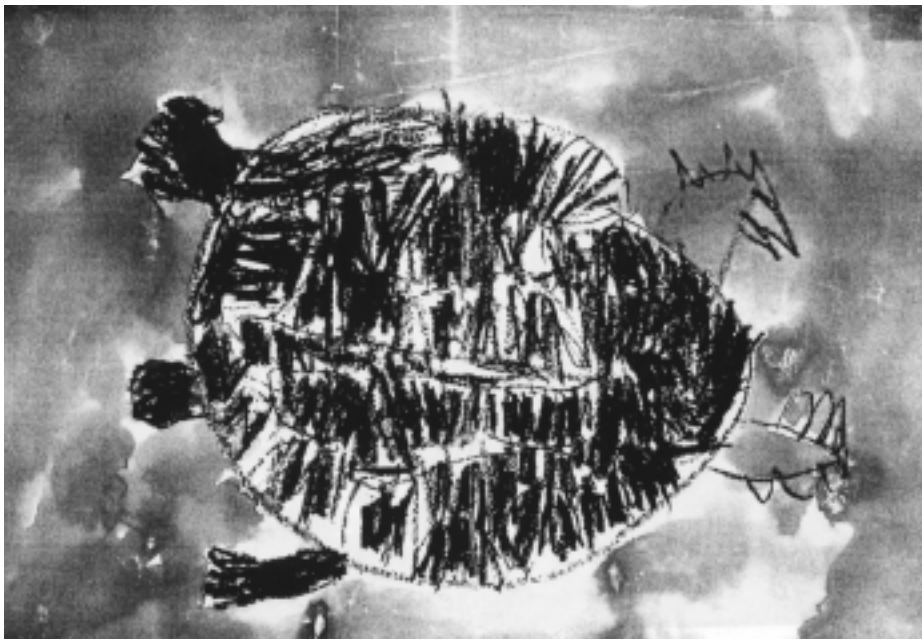
見ることと表現することとは、中々思うようになされないという現実に対して、十分に理解していかねばならないのである。

(図4)の作品を考えてみよう。テーマは、同じく「カメ」である。(図3)の絵との違いが大きい。つまり、形が具体的である。例のごとく意味付けをしなくても、何を描いているか理解できる。水面のコバルトブルーが、大変鮮明である。その水面を「カメ」が生き生きと泳いでいる。コバルトブルーと黒色が、強烈に彩色されている。2色が、効果的である。幼児のイメージは、常日頃、遊びをとうしての生活で育まれていくと考えられる。つまり、生活環境は、幼児の経験や遊びの中での知識が源になり、また、幼稚園の生活の場も重要である。共同活動や友達同士の総合的な影響によって、イメージが育成されていくことであろう。そして、幼児のコミュニケーションとの係わりが精神的な発展と知的経験、頭的経験や心的経験との関連によって、より、イメージが広がっていくのである。こうした多くの経験は、積極的に豊かな発想へと展開され、幼児の大きな成長へと発展していく。(図4)の絵の「カメ」そのものは、幼児の現在の姿を感じる事ができるし、今後の幼児の成長によ

(図3) 4歳男の子 -----カメ-----



(図4) 4歳男の子 -----カメ-----



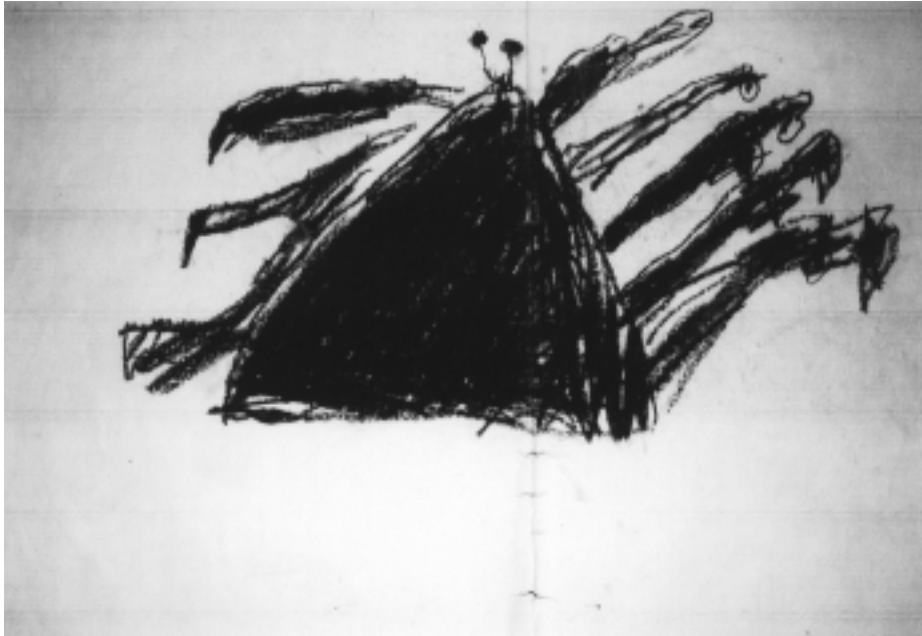
り大きな期待をすることができるであろう。幼児は、本来いろいろな現象を正直に捉えることができるし、私達は、そのものの意味合を認識しなければならない。(図5)と(図6)の作品は、5歳女の子と5歳男の子の水族館見学からの「カニ」の絵である。水族館を訪れた子ども達は、いろいろな魚や海の生き物の姿を見たことで、驚いたり歓声をあげたりした姿を想像することができる。5歳児の年齢では、現実の経験とイメージの繰り返しの中で生活をしている。実際、表現の世界で生々と創造的な造形活動を行っている。つまり、幼児が、表現するということは手や指の力を末端まで変化させている。さまざまな現象を幼児のイメージ感覚と言語表現等関連つけながら、身体と心の成長へと発展しているのである。年齢として見ていくと、年少、年中の成長過程からさまざまな生活経験や表現活動をより活性化へと発展させていく。造形活動から創造活動へと子どものイメージは内面へと浸透して、より子どもらしく言動にもメリハリが見られる。視覚から具体的な対象物の表現に至るまで、純粋な形での描画表現が新しいイメージとして生み出されてくる。つまり、表現そのものに創造性が感じられて、心の成長発展が「情操」としての大きな価値観になる。子どもの心と感性、経験等による知性は、子どもの成長を健全なものとして、美しいものへの憧れと感性豊かな人間へと成長していく。このような観点から表現することは、受容と表出することの二つの作用の中で積極的に進められる。

(図5)5歳女の子の「カニ」の絵は、フォルム(形)は単純化され表現はより形式化されている。「カニ」という全体のフォルムからの線と面の構成が、単発的に描かれているように既成観念の中で「カニ」そのものの形骸さを感じられる。しかし、素直にも感じられるということは、5歳児としての年齢期の中での表現力が、外面性と内面性の矛盾さを感じられる。しかし、そのことは(図5)の女の子の特性であるかも知れないと考えれば、受容と表出の観点で素直な成長過程でのフォルムであろうと安堵もする。外面性による視点は一般的に分かりやすく、内面性による把握は困難であろう。表現は認識の発達を示し、表現活動を繰り返しながら感性も豊かになり、描く、見るというリズムの中で育まれていくのである。色相の観点から見ると、赤色そのものが単色である。女の子にすると、赤という色の感情から「カニ」の色の鮮明さを感じ取ったことであろう。赤色からの連想では、(抽象的連想)強烈さや情熱、女性的などが上げられるが、フォルムの関連から考えていくと連想の赤色の性格から用いたと言うより、先入観念からの選択と思えるのである。つまり、イメージ色の色相以上に「カニ」そのものの色相からの表現ということではなからうか。こうした固定的な視点は、「カニ」は何色という抽象的、論理的に思考するというよりは、赤という色相感のイメージを前面に出したのではなからうか。

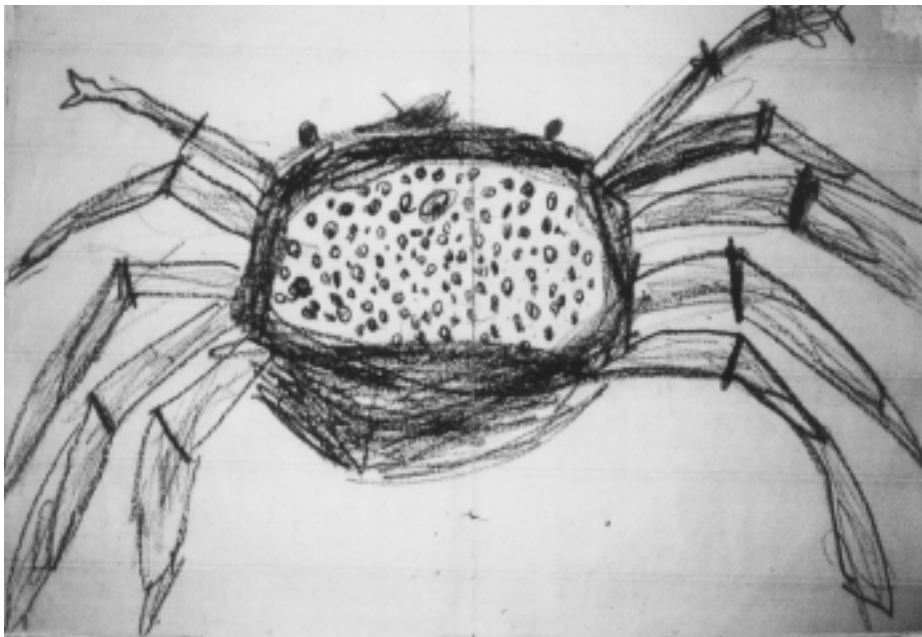
(図6)5歳男の子の作品「カニ」は、画面全体の表現から見の人を圧倒するほどの迫力を感じさせる。(図5)の女の子の作品とは対照的である。フォルム全体の中での「カニ」の躍動感と線の変化、ムーブマン(動き)等表現そのものが「カニ」といってよい。白地の空間に画面全体赤色相の描画線は、赤と白という組み合わせによって、彩度の高い赤色と明度の高い白色が描画の効果を高めていると思われる。つまり、赤色が太陽のごとく強烈さや情熱的な色彩感と白色の清楚で潔白感のある連想から考察してみると、対象性のある色彩感情を生みだしていると思われる。また、赤色の線描写がスピード感溢れるリズムを作り、縦横の流れる表現は感情とテクニックの巧妙さによって大変高いものがある。

このように(図5)絵と(図6)絵のように2作品をそれぞれの角度から考察すると、二人の性格と心身の成長過程の特色を知ることができる。つまり、(図5)絵の子どもは、性格的には大人しく、行動は比較的消極的である。内向性の強い子どもである。それに対して、(図6)絵の子どもは、日常生活において対象物の視点に積極的に立ち向かい、色彩、線の感情表現が外向性の強いものとなっている。

(図5) 5歳女の子 水族館見学より -----カニ-----



(図6) 5歳男の子 水族館見学より -----カニ-----



このように、内向性のものと外向性の状況が描画をとうして対照的ではありますが、それぞれの性格上の観点であり、むしろ長短の問題点は、ケースバイケースによって、よりよい方向へとケアをしていくことが重要であろうと考えられる。フォルムと色相との相関関係は、重要な要素であり、また、色相による心理学上の特色を、どのように生かしていくか考えなければならない。

・おわりに

各年齢別の幼児の描画表現を形と色相から見てきたが、実際にこのような特色は、幼児のおかれたさまざまな状況から考えられることはいうまでもない。しかし、また一面、幼児の「感覚」をとうしての発達、各年齢によって主観的発達から客観的発達へと関連する。年齢が増すことによって、外側の世界をある側面から注視して、論理的に考えたり言葉として表現したりするというのではない。むしろ、感覚による感情表現に近いものであろう。

動作、言葉そのものは、敏捷性のあるものではない。感覚は、対象の内面から外面の移行によって、心の中から表出する感情表現であろう。今日の世相は、複雑極まりない。自然破壊、社会変化、人心の貧困さ等数えれば限がない。最も大切な幼児期の成長発達していく状況の中で、何かが欠けていく。そのためにもどうしたらよいのか、という課題になってくる。実際子どもの作品の中で、形の萎縮、色相の淡泊が目につく子どももいて、テーマ設定の物足りなさを感じるのである。現代社会の中で、表現することの意味と感情豊かな人間性がより求められることは、重要なことなのである。環境の中に浸透して、素直に内面の美しさを発見していく。手探りの年齢であっても、積極的な視点と観察、感覚的な育成による心の表出や、直感的なセンスと情緒感ある情操の発達等、幼児の中の精神性を子どもらしく創造していくことは大切である。作ること、描くこと、美しいものを素直に感じとり、喜び、悲しみ、言葉としても表現できることは、人として求めてやまない願望ではなかるうか。

このように、色と形の観点から考察してみると、感情性の強い子どもの描画には、年齢との結びつきも強く出て、線や形の表現より色相の好みが出てくる。そして、理性的な自己表現よりも感情的情緒性が表現されている。実際に暖色系の赤色相や黄色相、橙色相等の使用が見られ、好みと相まって自由な暖かい愛情性と友達との協調等調和する傾向が見られる。こうした子どもの性格は、比較的友達も多く、環境に対する生活のバランスがとれて、成長への発達が著しい。

それに対して、寒色系の青、緑、青緑、等の色相を特に用いる子どもは、内部の感情を抑制すると考えられ、感情表現としての対象性に直視できないか、弱いため利己主義的になったり、心の内面に留まる傾向がある。対象物に対する素直さより、保守性の強い表現としてとられるようである。自己満足する自らの世界に没頭する傾向になりやすい。こうしたそれぞれの色の選択には、単色の色を使用する時と重ね合わせをする色面の効果によって、その特性を見ることができるとは興味がある。色相の感情表現が、混色をしたり重ね合わせをしたり単色で用いたりすることと、暖色や寒色の選択をしたりすることは、子どもの衝動的感情に対する反応と重なって、子どもなりのさまざまな意味合いが形成されるのである。

私たちは、実際に直面する子どもの姿を直視して、描画表現の真のあり方を知ることは大切であるし、それだけに、今後の課題として努力しなければならない。

<参考文献>

- 1) 那須田茂 こどもの美術教育 造形社 1975 . 3 p.11-12
- 2) 大井義雄 . 川崎秀昭 色彩 財団法人日本色彩研究所 2002 . 3 p.39-40
- 3) 太田昭雄 . 多田信作 描画のための色彩指導 芸術教育研究所黎明書房 1978 . 12
- 4) 新川昭一 . 花篤實 . 山田直行 . 岡一夫 表現 絵画製作 . 造形 三晃書房 1996 . 2
- 5) 船井武彦 造形表現 近畿大学豊岡短期大学 2005 . 4
- 6) 岩田健一郎 . 船井武彦 図画工作 近畿大学豊岡短期大学 2005 . 4
- 7) 花篤實 . 永守基樹 . 清原知二 幼児造形教育の基礎知識 建帛社 1999 . 5 p. 4 - 5

